

## ローマ 14 章 13～23 節「人々のために主に仕えよう」

今年度の教会の目標を「人々のために主に仕えよう」としました。周囲の方々の益のために、救いのために、また、兄弟の信仰の成熟のために、教会の活動や一人ひとりの礼拝と信仰生活が用いられていくことを祈り求め、心に留めていきたいと願います。そして、今年度の主題聖句をローマ 14 章 18 節にしました。

### 1. 弱い人と強い人（：1～13）

14 章 1 節。ここで言われている「信仰の弱い人」に対するそうでない人の関わり方のことがこの章の主題です。この「信仰の弱い人」とは、神への信頼が弱いということではなく、何かのルールを守らなければ信仰者として証を立てられないと考える人のことです。

具体的な一つのこととしては食べ物のことがあります。2 節。野菜しか食べないのは、当時売られていた肉の中には、異教の神々への供え物とされたものがあつたからです。そのような肉を食べたら霊的に汚れると考えるキリスト者がいたのです。あるいはユダヤ人でキリスト者になった人たちの中には、旧約聖書の律法に食べてはならないと定められていたものを食べない人たちもいたのです。その一方で、キリスト者は「何を食べてもよいと信じて」いる人たちもいましたし、異邦人でキリスト者になった人たちは食べ物に関する律法の定めを守る必要を感じていなかったでしょう。

そのようにキリスト者の間でも食べ物に関する考え方の違いがありました。そして、食べる人が食べない人（弱い人）を見下すことがあり、食べない人が食べる人をさばくことがあつたようです。その問題に対してパウロは「信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません」と教えているのです。

当時の教会だけでなく、今でも、またどのような文化の中でも、ものの考え方や生活習慣において、より厳格な人と柔軟な人がいるものです。そして、キリスト者の場合は、その人の聖書理解や信仰の確信が生活に現れて、行動の違いとなります。その違いから、行動だけでなく信仰についてもさばき合うことになりかねないのです。ですから、パウロが勧めていることを私たちも心に留める必要があります。

そのように信仰生活について自由な考え方を持つ「強い人」がいる一方で、そこまで自由になれない「弱い人」がいる教会において、両者の関係をどうすればよいかをパウロは 14 章後半でも教えています。

13 節。14 章の前半で「さばき合わない」という消極的な勧めをしてきたパウロは、それとともに後半では兄弟姉妹がつまづかないようにする愛の配慮を勧めています。

私たちキリスト者は福音に基づく自由によって生活することができます。人から強制されることも、人を強制することもできません。その自由とは神を愛し、隣人を愛する自由です。その愛による行動が大事なのです。

### 2. 弱い人への愛の配慮（：14～18）

14 節。まず主イエス様の教えから始めます。「それ自体で汚れているものは何一つありません」と主は教えました（マルコ 7：14～19）。つまり、律法にある食物の規定は新約時代にはもう文字通りに守る必要はない、キリスト者は何を食べても何を飲んでも自由だということです。

それでも、「何か汚れていると考える人には、それは汚れたものなのです」と言います。そのように考える人に対して、こだわりなく食べる人が「どうして食べないのですか。食べても罪ではないでしょう」などと言って批判したり、自分の考えを強要したりすることはつまづきを与えることとなります。

15 節。本質的ではないこと、たとえば食べ物のことで考え方の違いがあり、自分の考えを主張して、兄弟姉妹の心を痛めることがあれば、それはもはや愛によって歩んでいないのです。そのことで兄弟姉妹が信仰生活につまづいてしまうなら、神の愛とキリストの贖いのみわざを無駄にしてしまうこととなります。本質的ではない「食べ物のことで滅ぼさないでください」とパウロは強く願っています。

信仰生活は他の人との関わりの中で歩むものです。自分が正しいと考えることを主張し合って、対立することがあれば、それは神の民にふさわしいことではないとパウロは言います。

16 節。何を食べても自由だということは正しいのです。しかし、「あなたがた（強い人）が良いとしていることで、他の人をつまづかせて、「悪く言われぬようにしなさい」と忠告しています。

17 節。神が支配している神の国、教会では、「食べたり飲んだりすること」が大事なのではなく、「聖霊による義と平和と喜び」が満ちており、表されていることが大事なのです。

ですから、強い人は、食べることで弱い人に悲しみを与えるべきではなく、むしろ弱い人のために控えるべきです。もし兄弟姉妹がつまずき、信仰から離れ、滅びることになれば、それは強い人の罪となります。

キリスト者には福音に基づく自由が与えられていますが、その自由を制限する唯一のことがあります。それは他者への愛の配慮です。自分の確信を捨てる必要はありません。しかし、他者のためには自ら進んで自分の自由を手放します。それがキリスト者のあり方です。なぜなら、キリストによって与えられた自由とは、自己中心に生きるためではなく、愛によって歩むための自由だからです。隣人を自分自身のように愛することこそ、キリスト者の生活の基準です。神を愛し、隣人を愛する兄弟姉妹の群れには、「聖霊による義と平和と喜び」があるのです。

18 節。「キリストに仕える」ということは、この箇所文脈で語られているように、自分の自由を手放して「弱い人」に愛の配慮をしながら、信仰生活を続けることなのです。

### 3. 平和とお互いの霊的成長（：19～23）

19 節。このように勧められているように、「平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこと」がキリスト者のいつも心に覚えておくべき目標です。「お互いの霊的成長」とは「お互いを建て上げること」ということばです。

20 節。キリスト者は何を食べても良い自由があります。しかし、自分が食べることで、弱い人がつまずくことになるなら、「悪いもの」となります。平和を乱すことになり、お互いを建て上げることになりません。

逆に良いことは、21 節。福音に基づく自由が与えられていますが、それを行使せず、兄弟姉妹が、特に信仰の弱い人がつまずくようなことをしないことが「良いこと」なのです。

愛の配慮を勧めるとともに、パウロはそれぞれの信仰を尊重しています。22 節。自分の確信を捨てる必要はありません。ただし、その信仰とそれに基づく行動によって、他の人を傷つけてしまい、そのことで自分自身にさばきをもたらすことにならないようにと注意しています。

23 節。何でも自由に食べる人の態度に影響を受けて、確信がないのに食べることになるなら、罪を犯すこととなります。「なぜなら、それは信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは、みな罪です」と言われます。

このことはまた、信仰の弱い人にも向けても語られているでしょう。信仰から出ていないことをすべきではないのです。信仰から出ていることであれば、神に信頼しながら行きますし、その結果、神に栄光を帰することになります。けれども、信仰から出ていないなら、神への信頼も神に栄光を帰すこともないので、神を離れて自己中心に行くこととなりますから、それは罪なのです。

「信仰の弱い人」とは何かの決まりを厳格に守らなければ信仰者としてふさわしくないと考える人のことです。逆に、福音に基づく自由が与えられている者として、柔軟に考える強い人もいます。また、私たちはそれぞれ、弱い部分もあれば、強い部分もあるのではないのでしょうか。強い人は自由で、こだわりのない言動をするので、それが弱い人にとってはつまずきを与えるかもしれません。一方、弱い人は厳格な言動をするので、それが押し付けに感じられるかもしれません。自分の言動が兄弟姉妹にどのような影響を与えているか、注意する必要があります。

私たちキリスト者はそのような違いがありますが、しかし、皆同じイエス・キリストを信じる信仰によって救われ、キリストにあって一つとされています。教理において一致しているとともに、神の愛によって互いに受け入れ合うことを求められています。そのために、弱い人への愛の配慮が必要です。また、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つことを常に目標としていることが大事です。

私たちは、他の人のつまずきとなるものを置かないように、愛の配慮を意識しましょう。また、自分の考え方やこだわりに固執するのではなく、平和を保つこととお互いを建て上げることを追い求めましょう。強い者は愛において、弱い者はさばくことなく、互いに信仰と生活において成熟することを求めましょう。